

子ざると母ざる

母が子供に読んできかせてやる童話

小川未明

青空文庫

ある日、かりゆうどが山へいくと、子ぎるが木の実を拾ってたべていました。もうじきに冬がくるので、木の葉は紅く色づいて、いろいろの小鳥たちが、チツ、チツ、といつて鳴いていました。

かりゆうどは、子ぎるを見つけると、足音をたてぬように、近寄りました。

「はてな、子ぎるひとりとみえるな。親ぎるはどうしたろう？」

あたりを見まわしたけれど、母ぎるの姿が見えませんでした。

「きつと子ぎるめが、母ぎるの知らぬまに、遊びに出たのだ。鉄砲で打つのは、かわい

そうだ。どれ、つかまえてやろう。」

かりゆうどは、腰につけていた、つなで、おとしを造りました。そして、自分は、その

端をにぎって、木の蔭に隠れていました。

それとも知らずに子ぎるは、木の実をさがすのに夢中になっていました。そのうちお

としの中へ入って、はつと思ふまに、子ぎるは、かりゆうどの手に捕らえられてしまいま

した。

かりゆうどは、村へ帰ると、子ぎるを家の前の木につないでおきました。すこし馴らし

て、町へ売りにいこうと思つたのです。

村の子供たちは、見物にきて、芋を投げてやったり、かきを投げてやったりしました。子ぎるは、上手にそれを受けて、食べていました。山の林で、拾つてたべた木の実のようにおいしくありませんでした。寒い西風が吹いて、木の枝が動くのを見ると、山のお家が恋しくなるのでした。

「お家へ帰りたいな。ひとりでは、道がわからないし、自分の力では、腰についている鏈を切ることができない。」

子ぎるの目からは、熱い涙がわきました。

そこへ、つえをついて、白いひげのはえた、おじいさんがきました。

「孫たちがほしがるので、この子ぎるを、私に売ってくださいませんか。」といいました。

「おお、酒屋のご隠居さんですか。あなたが、このさるを買ってくださいれば、私は、町へ持つていく骨おりなしにすみます。」と、かりゆうどは、答えました。

子ぎるは、こうして、その日から、酒屋の正ちゃんや、かね子さんの遊び相手となつたのです。

かね子さんも、正ちゃんも、どちらも欲張りでした。

「このおさるは、僕のだよ。」と、正ちゃんがいうと、

「いいえ、このおさるさんは、私のよ。」と、かね子さんがいいました。

「ちがうよ、僕のだから。」

二人は、たがいにいい争って、祖父さんのところへききにきました。

祖父さんは、ただ笑って、返事にお困りになりました。

「さあ、だれのだろうな。それは、おさるさんにきいてみるのが、いちばんいい。」と、祖父さんは、おつしやいました。二人は、こんどは、子ぎるのところへまいりました。

「おさるさん、僕のだねえ。」と、正ちゃんが、いいました。

「おさるさん、私のだわねえ。」と、かね子さんが、いいました。

りこうな子ぎるも、やはり返事に困って、しばらく頭をかしげて考えていましたが、

「私は、私をいちばんかわいがってくださいる方のものになります。」と、答えたのです。

正ちゃんにも、かね子さんにも、子ぎるの返事が、わかったでしようか？

山では、母ぎるが、かりゆうどにつれられていった日から、夜も昼も子ぎるのことを思

つて忘れる日がありませんでした。

「いまごろはどうしているだろう。あれほど、遠くへひとり遊びにいつてはならぬとい

つたのに、いうことをきかないばかりにこんなことになってしまった。達者でいてくれるだろうか。」と、里の方を見て心配していました。

思いがけなく、山のからすが、母ぎるのそばへ飛んできて、

「ご心配なさいませすな、子ぎるさんは、お達者で、かわいがられていますよ。」と、自分の見てきたことを話してくれました。

母ぎるは、それをきくと、どんなに喜んだであります。幾たびもしんせつなからすに向かつて、お礼をいいました。そのうちに雪が降りはじめました。山も、野原も、真っ白になりました。

山のからすから、子ぎるのいるところを聞いた母ぎるは、ある晩山を下って、雪の野原を歩いて、子ぎるのところへたずねてまいりました。

それは、寒い晩で、子ぎるは、箱の中のわらにうずまって、眠っていました。すると、だれか起こすものがあります。驚いて、目をさますと、いままで夢で見っていた、なつかしい母親が、顔の上からのぞいでいるのでありました。

「お母さん！」

「しっ、しっかに、いま、おまえをしぼってある鏈を切つてやるよ。」

母ははぎるは、指ゆびのつま先さきからも、唇くちびるからも血ちを出だして、とうとう堅かたくい鏈くさりを切きってしまいました。そして、ふたりは、たがいに抱だき合あって喜よろこび、ころげるようにして、雪ゆきの中なかを山やまの方ほうへと逃にげていくのでした。

雪ゆきの上うえには、二ひきのさるの足跡あしあとと、ところどころに落おちた赤あかい血ちのあとが残のこっていました。が、神かみさまは、この親おやこ子こをかわいそうに思おもわれて、かりゆうどの追おいかけてこぬようにと、夜明よあけ方がたから、ひどい吹雪ふぶきとなさいました。それで、なにもかも真まっ白しろになって、あとがわからなくなってしまうました。

正しょうちゃんちやうと、かね子こさんは、朝あさ、起おきてみて、子こぎるがいなくなったので、どんなにびつくりしたでしょう。けれどお山やまへ帰かえったと知しったら、「それは、よかった。」といつて、喜よろこんでくれたにちがいありません。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「愛育 2巻11号」

1936（昭和11）年1月

※表題は底本では、「子《こ》ぎると母《はは》はは《ぎる》」となっています。

※副題は底本では、「母《はは》が子供《こども》に読《よ》んできかせてやる童話《どうわ》」となっています。

※初出時の表題は「小猿と母猿」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子ざると母ざる

母が子供に読んできかせてやる童話

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 小川未明

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>